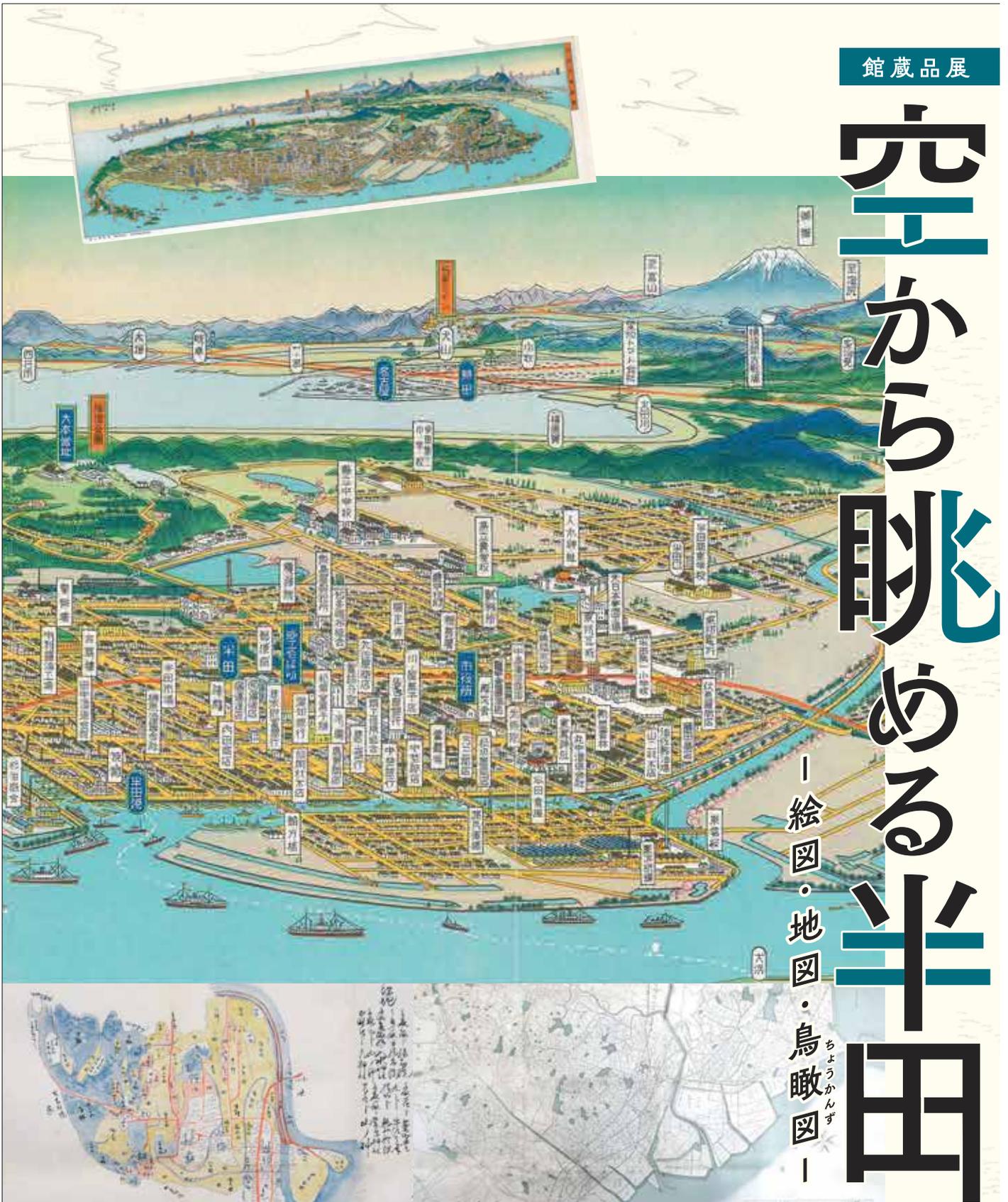


館蔵品展

空から眺める半田

— 絵図・地図・鳥瞰図 —
ちようかんず



会場

〒475-0928 愛知県半田市綱ヶ丘4丁目209番地の1
半田市立博物館
TEL〈0569〉23-7173

開館時間

10:00～18:00

休館日 3/9月・16月・23月・30月・4/6月

半田市立博物館
公式HPはこちら



半田市立博物館
公式Instagram
はこちら



令和8年

3月7日土～
4月12日日

ごあいさつ

現代を生きる私たちの生活は、地図と密接に関わっています。カーナビゲーション、スマートフォンの地図アプリや、観光パンフレット、案内看板など、いつでも・どこでも地図から情報を手に入れることができます。

もちろん、古来より地図は情報を伝えるための手段として活用されてきました。半田市域、知多半島についても、様々な地図が作られています。

本展では、この地域に関わる、江戸時代から昭和初期に作られた地図を通して、半田市域・知多半島のかつての姿や、地図上での描かれ方をご紹介します。目にも楽しい多種多様な地図を通して、この地域が歩んできた歴史や、地図の奥深さを感じていただけますと幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力・ご助言いただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

令和8年3月
半田市立博物館

第1章「村の統治と絵図」

飛行機や人工衛星が無い時代、人々はどのように自分の住んでいる世界の全体像を知っていたのでしょうか。

江戸時代の出版ブームは、日本や世界の地図を庶民にも手に取りやすくし、世界の認識を形作りました。

また、村を管理運営することにも地図は活用されました。色を付け、絵のようにあらわした地図は「絵図」と呼ばれています。

本章では、半田市域を描いた江戸時代の村絵図をご紹介します。村絵図を通して、村の住民たちがどのように自分の住む村について知っていたのか、考えてみましょう。

江戸時代の絵図

江戸時代の日本図や世界図は、ヨーロッパ製の地図や、伊能忠敬をはじめとした測量・探検の成果を取り入れたものが刊行され、民衆に広く親しまれました。

一方で、村々の状況を把握したり、統治や争論に使うために、手書きの「村絵図」が作られました。集落の位置、地名、道、山林、河川、池といった、村内の詳細な情報が記載され、藩の役人や村役人によって活用されました。

例えば「知多郡乙川村御山絵図」は、山の部分を緑色や茶色で着色しています。山の名前や面積を記載し、状況を一目で把握することができます。この他にも、河川や池を強調させたもの、田畑を強調させたものなど、目的に応じて様々な村絵図が作られました。

尾張藩の村絵図

尾張藩は、寛政期・天保期・弘化期などに藩内の村々へ村絵図の作成と提出を命じました。

現在の半田市域である、乙川・成岩・有脇・岩滑・半田・亀崎の六か村について、1841年(天保12)の村絵図が「徳川林政史研究所」に残されています。

1841年(天保12)4月29日に出された尾張藩の触書からは、村絵図作成について、尾張藩側用人の指示を受けた勘定奉行所が、各陣屋を通じて管轄する村々へ絵図徴収を命じたことがうかがえます。

また、作成の仕様について、触書には以下のように記されています。

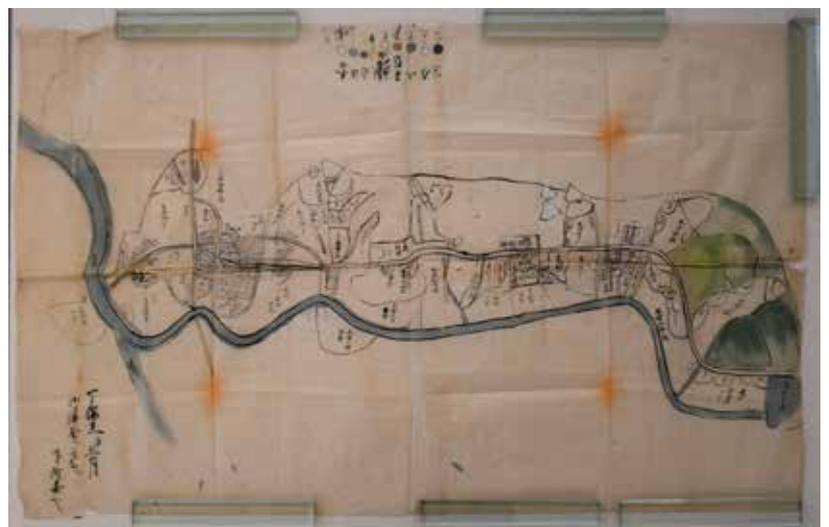
- ・蔵入（尾張藩直轄地）と給地（藩士の知行地）との地境、給地地境を明らかにすること
- ・村境、寺院・社地、用悪水等を色分けして調べること
- ・寛政期の調査と変化した所があれば明示すること
- ・上直紙4枚継、6枚継程度の大きさに仕立てること

本展でご紹介する「岩滑村絵図」や「乙川村絵図下書」は、記載内容から、天保期の村絵図の控えであると考えられます。

天保期の村絵図作成の目的ははっきりと分かっていませんが、尾張藩が村々からより多くの年貢を徴収するために、領内の状況を把握する必要があったと思われる。



乙川村絵図下書(1841年(天保12)か)



岩滑村絵図(1841年(天保12))

第2章「新たな時代と地図」

明治維新を迎え、明治政府は新たな社会のなかで、改めて国土について把握する必要がありました。そのために、地図の測量技術をヨーロッパから習い、正確な地図作製に取り組みます。

また、地租改正により土地の地番や面積などを詳細に知ることが求められ、村ごとの住民による測量や地図作製がおこなわれていきました。

半田市域では1937年(昭和12)に、知多郡の半田町、亀崎町、成岩町が合併し、「半田市」が誕生します。

本章では、新たな時代を迎えてどのような地図が作られたのか、ご紹介します。

明治政府の地図作製事業

国土を把握するために明治政府によっておこなわれた測量事業は、当初内務省と陸軍が担当していましたが、1884年(明治17)に統合され、以降は陸軍(陸地測量部)が担うこととなります。当時は西南戦争(1877年(明治10))の発生や、外国の脅威がある時代でした。このことから、地図は国土防衛のために軍事上重要な情報であったことがうかがえます。

全国の地形図である「正式図」は、1890年(明治23)より整備がおこなわれました。地形図の発行にあたり、縮尺は「2万5千分の1、5万分の1、20万分の1」、さらに5万分の1地形図を「基本図」とすることが定められました。

このときに決められた縮尺は、現在の地形図でも引き継がれています。



半田市全図 (1957年(昭和32))

土地宝典

「土地宝典」は、明治時代以降各地で刊行された、市町村単位の地図帳です。おもに、租税の対象となる土地の所有を調査し、確定させるために民間の出版社によってつくられました。土地台帳と地籍図を合体させるなどして、土地の場所とその所有者を確認しやすいよう、編集して刊行されています。

地図には、区域名称（町名・大字・小字）、地番、面積、土地の種類、等級などといった情報が含まれており、土地に関する詳細な情報を知ることができます。

半田市域については、「愛知県知多郡半田町土地宝典」、「愛知県知多郡成岩町土地宝典」、「愛知県知多郡亀崎町土地宝典」（いずれも1934年（昭和9））、「半田市土地宝典」（1957年（昭和32））があります。

土地の所有者だけではなく、行政でも長年活用されてきた地図です。

第3章「近代の多様な地図」

私たちの日常では、駅や公共施設、観光地などで、目的に応じた様々な種類の地図を目にすることがあります。旅行先で地図を眺めながら予定を立てたり、目的地を探したりする経験は、旅の醍醐味のひとつです。

近代では、前章で見てきたような行政のために作られた地図だけではなく、測量による正確なデータを活用した、民間による地図も作られていきます。

写真を掲載したり、色を付けたり、見やすく分かりやすくするための工夫が施され、地図を使う人・作る人の目的に合わせて、多様な地図が作られました。

本章では、経済や観光、信仰などに関わる、半田市域や知多半島に関する多様な地図をご紹介します。

知多四国の参拝案内

「知多四国」の霊場は、1800年代に開創し、1893年(明治26)に「知多新四国霊場」、1983年(昭和58)に「知多四国霊場」と名称が改められ、現在に至ります。

「知多半島古図」(1881年(明治14))や「愛知県知多郡分土霊場新四国札所地図」(1920年(大正9))は、知多四国の霊場が地図に記載されています。

これらの地図は「参拝案内」として作成され、知多四国の巡礼者だけではなく、土産物として巡礼者以外にも広く親しまれました。

商工地図

個別の商店名や会社名が記載された、戦前の都市案内地図は「商工地図」と分類され、明治時代の末より民間の出版社により刊行されました。

特に「大日本職業明細図」は、全国の主要都市を網羅し、台湾、朝鮮、旧満州にまで範囲を広げています。

施設は必ずしも網羅的ではなく、一部省略されています。裏面には、商店や会社の一覧(広告)が掲載されており、当時の経済活動を知ることができます。



亀崎商工案内図(昭和初期)

第4章「鳥の目線で眺める」

明治時代以降には、測量に基づく正確な地図が作られて広まっていましたが、絵師によって描かれた、絵画的表現による地図も作られていました。

「鳥瞰図」とは、空を飛ぶ鳥のように、斜め上から眺めたような視点を用いて描かれた地図を指します。これら鳥瞰図は、地元の業者や団体によって製作され、土産物や商店・旅館などの広告として、日本各地で作られました。絵師により、地域の風景が華やかに彩られ、宣伝に一役買っていました。

本章では、半田市域や知多半島を題材とした鳥瞰図をご紹介します。

「大正の広重」吉田初三郎

著名な鳥瞰図の絵師として「吉田初三郎(1884～1955)」が知られています。吉田初三郎は、1913年(大正2)に描いた「京阪電車御案内」が当時の皇太子(のちの昭和天皇)の目に留まり、その分かりやすさと美しさを讃えられたと伝わります。

初三郎の鳥瞰図の製作方法として「現場主義」が挙げられます。スケッチを基に写実的に鳥瞰図を構成し、忠実な描写や風景へのまなざしを備えて作品を作り上げました。

みずからを「大正の広重」と称し、自身の作品を「初三郎式鳥瞰図」と呼んだ彼やその作品は、大正・昭和期の鳥瞰図の代表的存在といえ、彼の作風を模倣するような作家も多く生まれました。



知多半島古図(1881年(明治14年))



愛知県知多郡分土靈場新四国札所地圖 (1920年(大正9))



「半田市鳥瞰図」(1938年(昭和13))

地図の世界への招待

本展では半田市域や知多半島を描いた様々な地図をご紹介します。

身近な地域を調べるときに、地図を活用して昔の地形や市街地、田畑の場所を調べることができます。また、色鮮やかな地図を眺めて楽しむこともできます。ここでは、無料で利用することができる Web サイト（デジタルアーカイブ）を一部ご紹介します。

本展でご紹介しきれなかった地図もありますので、ぜひご自宅で地図の世界をお楽しみください。

◆時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」

全国の 59 地域について、明治期以降の地形図を表示できるほか、地理院地図（国土地理院発行）等、現代の地図と見比べることができます。



◆ひなた GIS

宮崎県職員が開発し、宮崎県が運用している地図・統計サイトです。宮崎県だけでなく、全国の統計・地図データが集められています。



◆古地図コレクション（古地図資料閲覧サービス）

国土地理院が所蔵する古地図などを公開しています。世界図、日本図、伊能図など、歴史的に重要な地図を閲覧することができます。



◆吉田初三郎式鳥瞰図データベース

国際日本文化研究センターが提供する、吉田初三郎や彼の影響を受けた同時代の絵師が描いた鳥瞰図を閲覧することができます。



主要参考文献

愛知県図書館 Web サイト. 第 4 回郷土資料常設展『尾張藩の村絵図』.
<https://www.aichi-pref-library.jp/s005/about/area/010/040/20250316172150.html>.

さいたま市 Web サイト. 第 36 回企画展「地図で見るさいたまの近代」展示
Web 解説.

<https://www.city.saitama.lg.jp/004/005/004/005/008/014/002/36kikaku/pl20510.html>.

金田章裕・上杉和央 2012. 『日本地図史』. 吉川弘文館.

編集 / 発行 半田市立博物館

〒475-0928 愛知県半田市桐ヶ丘4丁目209番地の1

TEL : 0569-23-7173 E-mail : hkbutsu@city.handa.lg.jp

発行日 令和8年3月



Handa Municipal Museum